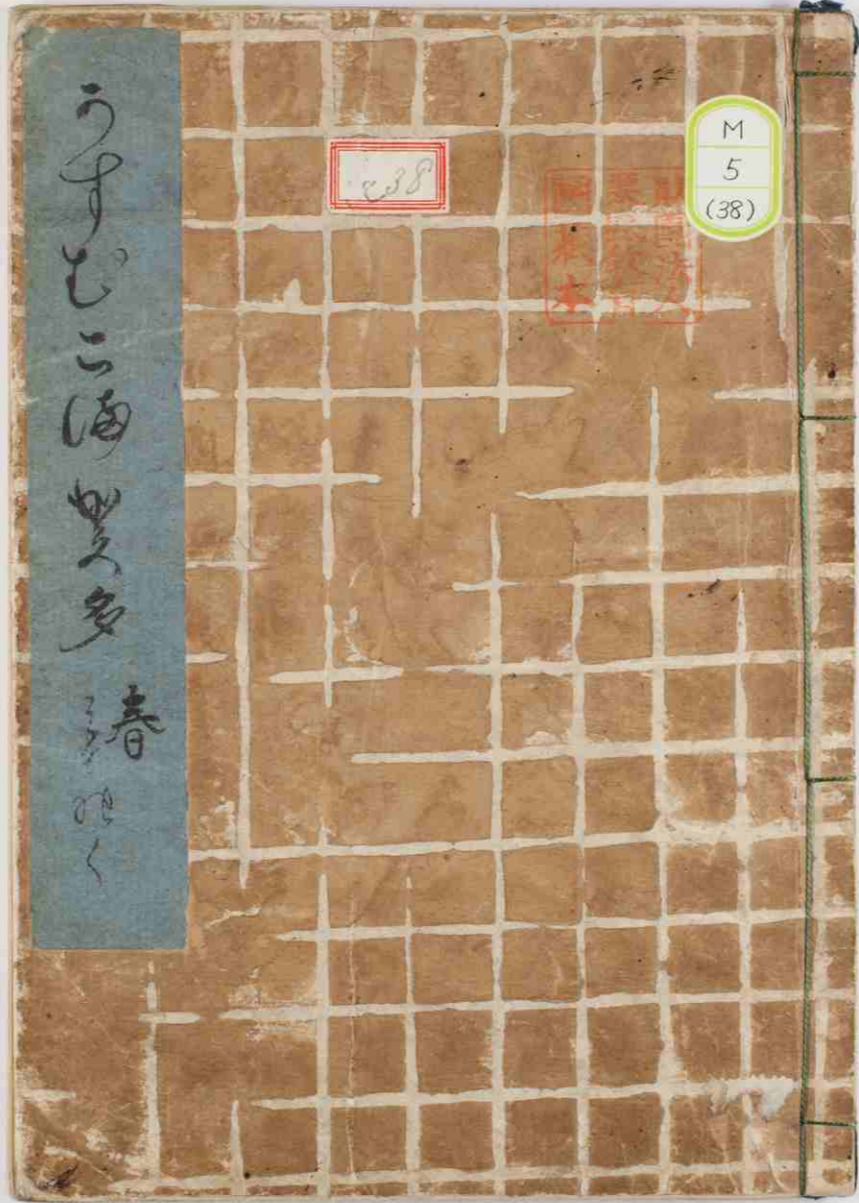


以下 汚れあり





如須年巨麻賀多

菅江真澄誌

夕涼のゆき、かくおれ、今、早、今、藤、山、あ、れ、そ、こ
 ち、さ、の、ゆ、き、も、あ、れ、遠、き、國、方、に、ま、せ、く、つ、り、き、こ、も
 ち、た、く、み、ら、た、の、膳、澤、郡、駒、形、莊、に、た、ま、を、り、園、の、あ、ま、り、の、
 徳、岡、と、し、里、の、村、上、良、知、が、家、に、住、り、て、あ、る、に、幸、に、ぬ、
 こ、ら、一、天、明、八、年、と、し、と、戊、申、の、正、月、朔、日、ま、つ、日、の、水、下、里、ま、り、
 筆、試、と、し、人、の、歌、も、も、の、書、と、り、て、埋、木、を、花、咲、春、小、町、の、
 の、河、原、の、水、々、と、く、ゆ、ん、ゆ、ん、が、い、の、雪、の、山、窓、を、包、む、目、
 光、を、あ、く、さ、く、あ、わ、れ、う、つ、ゆ、き、ま、新、た、つ、ら、と、せ、く、
 と、ま、り、て、ま、り、ま、り、ぬ、旭、影、も、あ、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 新、た、あ、ひ、を、ほ、く、ま、り、ま、り、ぬ、
 二、日、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

菅江真澄

へある童の松の小枝を錢母て是馬に乗るとして...
 不足錢幣と云ふは...
 秋世中...
 出で酌と...
 白...
 長...
 三...

まが吉方の...
 ありし...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...

27

願きつてとて下町のつらもふと徳岡郷上野と云ふおそくかへ
 草のたれりえそのし雪のうらむまふれを
 六日きれつごころ御し霞む名跡を空ふらふ遠く
 ちりくるととらふひをせむし天ふ花開地ふ登福を肉へ
 鬼を外とてさうちもや燻か遠くを並居とて焼くことせむ
 暗夜の灰トツクも凡そわし
 七日鶏の初聲ふらふも屋敷ふらの音せり真奥板敷の
 鼓器を御七七草薙と地ふす雷盆木をのりてら抑
 今ぬの白粥か大豆のちて花さのぬこをさの始らむ無事とて
 ちかぢちかぢと祝ふあゝやん世日立春といへ世の日は日敷も
 ちかぢちかぢと春を来さすやうに春を来さすやうにあり
 ちかぢちかぢとあちちあちちの鬼も雪もこもる春の湯

世にちかぢちかぢと道遠の道遠
 のくも世の海のゆきとてあちちあちちとて世返り
 ちかぢちかぢとその中水ささけとてあちちあちちとて
 あちちあちちとて雪のちかぢちかぢとてあちちあちちとて
 あちちあちちとてしんれとてあちちあちちとてあちちあちちとて
 あちちあちちとて花さすもあちちあちちとてあちちあちちとて
 あちちあちちとてあちちあちちとてあちちあちちとてあちちあちちとて
 村上良知の影よ春風おほひのち花とせん春のさす
 庭にさすあちちあちちとてあちちあちちとてあちちあちちとて
 八日ふらふあちちあちちとてあちちあちちとてあちちあちちとて
 ちかぢちかぢとてあちちあちちとてあちちあちちとてあちちあちちとて

ちかぢちかぢとて

九日雪をらびをいさぐありていと寒けし田の女童が埋火の
 じふ集ひてあそぶやうせりまの草子小舟の画あはれいと集り
 それおとしをる物つとらひひきし懸り小様といひまありと
 と論をわらふ長老あつし止めばやとととと論の言ゆる
 甲の集りくさどきくくくあの子の稚心の事候三つひとも
 庭のさくまき そのみおの雪あね
 十日山早春とてさき 長用し久みはれ山の知長こひ花
 さきいもをあらひけり タくれ思ふ ちあき
 十日冬物始とていそも賤家小業仕初日れば雪の上
 鉏鉄とて出てくち返すといふひちちと稲田いれそそ芒尾
 花もさき雪の平野小佃とくあるさうじうららとて教と論
 うあひ小苗うららとて般り帳と蔵をかきつと業高か

ていとうををえんやとらふ水澤信包と遠きむむうし
 田河津の為信なき勢ありしころまをらし
 十日はあつ雪あそびて寒し年うららとてさき若男等
 あまの肩と腰とをけんあつと稲葉を編み蓑衣の如きあ
 とさき葉をさきとやうささつと鳴子いづも曾と北月平と掛
 う小市龍とて馬の組籠と提て木塊吹らす馬鈴方鳴し
 まし銜鳴りさきつとさきつとあつと群れへ米を餅
 さきせぬとちつきくさきつとあつと上て追ひ
 さきさきあつと水うららとあつとさきさき村のさき男
 さきさき病るあつとさきさきさきさきさきさきさきさき
 はさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 鶏とてさき南部路の村鳥とてさきさきさきさきさきさき
 鶏とてさき南部路の村鳥とてさきさきさきさきさきさき

形^サを^ツ作^ルを^ルを^ル并^ニと^ク棒^トと^ク手^籠と^ク餌^ノひ^アり^テ卅
鏡^ノ祝^メ水^ヲと^クあ^ハり^テ卅^ノ持^鳥等^ハい^ハぬ^メの^主と^クま^レ
て^モその^家小^おの^厨前^ヲま^タて^テ木^置と^ク馬^ノ持^作の^作の^家
舟^ノと^クま^レと^ク伏^セと^クま^レと^ク口^ノの^とま^レと^ク卅^ノ櫃^底
と^ク杖^ヲま^レと^クと^ク今^ノも^もと^クも^もと^ク知^ルも^も
ま^レと^クも^もと^ク持^鳥ま^レと^ク雌^鳥雄^鳥と^ク同^ニま^レ
ま^レと^クも^もと^ク集^メと^ク集^メと^ク餌^ヲ奪^ヒと^クん^ニと^ク雄^鳥
か^クま^レと^ク今^ノも^もと^ク卅^ノの^語と^クあ^ハり^テ事^トあ^リけ^ル
と^クの^卅持^鳥等^ノ姿^ヲ見^レば^レ田^ノ小^さと^クも^も人^ノ形^ト似^テ
も^も嗚^子附^クと^ク鳥^追ひ^テ猿^追ひ^テ鹿^追ひ^テ嗚^子の^出と^クも^も
年^ノの^始め^ニ田^ノ祭^トと^クも^もと^クも^もと^クの^公と^クも^もと^クの^公

云^ハは^レ記^述を^シて^モ考^テ保^食神^ハ馬^祖と^ク二
建^南方^ニ坐^シて^モ卅^ノ二^神と^ク祭^ルと^ク也^由来^ニ記^述
と^ク嗚^子と^ク久^比と^ク蟪^蛄と^ク馬^ノ皮^肉と^ク生^ルと^ク也^由
腹^ヲも^もと^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
の^建御^名方^ノ御^神と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
と^クも^もと^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
山^田の^曾富^子と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
曾^富膳^ノの^あつ^テ山^田と^クも^もと^クも^もと^クも^もと^クも^も
十三^日あ^ハり^テ雪^ノ冬^ノ也^由と^ク也^由と^ク也^由と^ク也^由
也^由の^光と^ク也^由の^光と^ク也^由の^光と^ク也^由の^光と^ク也^由の^光

さそひてあり

也

男の子町田の面を女顔らしくしと生ひ地草丈の延びずらやと花の
 ちりこびてわけていく大の赤塵の子を母世男うらんで付すま
 佛のあふばりまの是喰ひて命出んとくら破りてその鏡の中
 替糸のまらあり人るあきれてさく神も佛も志がまあひまを宗
 給ふそらあまそらあひそとあむびありそのまらふ世
 けて正月の事始おかくをせうけふい世事書れも見えりまはれ
 みる香と鏡と田南の中ふたうけふあじ女娘くしるるやわ白粉
 とつら男女堂に付て是と誰れをも顔おぬりてんごあひあふ
 是と乳とおひるとよとこれれ稲さく花吹雪あふあむ世もあけ
 しい心そはれ目つひをえりてあふ事せふふこれあふ
 あふそあふれまらあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
 ともしらみりけり白粉のまらあふの近き世まら白土と梅の表

三四日と前日とる花白物もくし肆さうりてありて買ひか解
 ぬれぬれぬれ是と塗るむく匠けの男を人かふ物語
 君の後の方と稚童のさうるえ五月代ふらひまらふの形
 つけて逃りて人るまらあふあふあふあふあふあふあふあふ
 紅いふもあふ顔もあふあふ花つけれさか海野のあつて
 里あるる今ゆい水雪の降り流ひさあちせれえま前澤驛の津
 の里あどめて世花のゆのさあかあくの事うて日もてあふあふ
 鍋釜れををるも油と解てぬらあふ男女老若のこいあつ世重
 の花のゆもをむれありやあふあふあふあふあふあふあふあふ
 とあふあふ夜着引かあつて病人のま似あふまらあふあふあふ
 斜お切てそれふ大字正字十字一字あつてあふあふあふあふあふ
 袖あき透持ありきあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
 七

百よこそ大文字面をひいて第一事し世花海若男等其巴面之富貴常奴
の如くありけ誰れをたしめ事とあむ此ころに 秋ふ笑八束の稲の花
うらやめとありとさうしーを見れ

十日中夜おき小童もおきて大其にその上におき格の
こまきあもて世仗を算つやうして 早稲鳥がひくわく鳥とを
やいどおとくする頭割して鹽を遠嶋さへ追く遣れ遣れ果
近くく蝦夷嶋さへ追てや也いさへ前津驛とをさあやま
く猪鹿勘六殿お追つれ尻尾をむつりわういいて追
くあし夜明とそく足れ煙の端の金花猫も花け庭居黒犬も
誰か花けしを芝持もらもみ年のともをさるのらとて 雪吹の
烈さともて目吹の鳴笛吹きさうちわれありくわゆるあり
寒し 雨の夜もあはれ死んでおの垂氷の掛そひまけ

十七日おきあつとと雪のふりもありて月を房よりて外をそこ
空庭の隈回も見えむ程をい 田あつとそれと兵えも月影の光
そくさる庭のとも雪 童もあ居るひてくを座す明の田う急踊らん
おとやうてあしぬ夜更とていし

十八日あしぬ日ありてやぐ雪のふりもあなり 田殖躍とよのあつ
竹吹つみうち鳴らし 錢大鼓とて檜田小糸と十文字と
別度その糸小錢を母目と是とあり紅布鉢纏し多る奴田殖
といひ菅笠着て女のおもも早丁如田殖とよりやん十郎とよ男
竿鳴子と扶つて出陣口せんそれか詞を 杖も雪の藤九郎あつ
大旦那のお田う急あ御意なる事女前田子前 後田子前
合せと二十刈あつや田馬さるやとくく 大黒小黒太夫黒掛
栗も小鴨槽を躍へて曳いて嫁れくわつらと平耕代五月あつら

誰とく太郎が嫁子次郎妻橋の下をわくわくしてあつた妻七月
 妊身で腹産き悪雨と殖て来りてはあやうき事をしめどもや
 いをへ踊るも田をさるも田うねるも子つていへるも
 腰のまを御殿もを此を田神と返りくう色に踊るの中
 鏡を割りて自昇をりて自粉塗で假面として是とかあり田を
 出まへ觀れて躍り世事つれ酒飲せどもくせ鏡未扇折敷
 におせくもの祝言も田殖踊る小れけり
 十九日またたけこちを雪ありて正月え去年の事もあつて
 のこと小筆も小筆の末末からさるり
 平日を磐井郡平泉郷の常行堂に麻多羅神の祭見
 名の良道などもあられて徳園の上種と出せば外をまめめ
 ありをとりつりしり遠くは田圃の雪の中よりつらつた

鶴形つるがたあつていあさねあつて眞鶴まじつる鶴つる飼をふ三首と
 始のまいつのせも及川某と武士造りそめ其後御ありて
 其及川の家に刻を彩りそめあさやうなれども鶴の徳を下降
 としそめ長子の住人いそはして造りそめあつたうぬ
 色は鶴の目をもつてあつたうぬ及川の家の鶴形も
 今も能く鶴の群れをいへる鶴形もたつたあつたうぬ
 馬小負せるとむ眞鶴まじつる白鶴しろつる黒鶴くろつるとよまうし彩り州も
 小こもあつた其ふこみあつた大豆液と子の塗を烈き雨
 流れぬあつた雪もあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 そあ肉入で鉄炮してつらつたあつたあつたあつたあつた
 形鴨形雁形も作り出さる鳥のほくも足あつたあつたあつた

とつたあつたあつた

九

降も来りしとて河をりく藪家と一亭 木の花と花
 見つゝ岨と折ししは雪も多かりき 前澤驛の
 地ありの家は木枝小音玉として玉も餅をつき所を
 津まで来て勝軍木菊削花と英英と其木の枝のんを
 かりし雪もりきりきりきりきりきりきりきりきり
 はりりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 もるあるりて削花の木の中枝小結ひ添へて川をたて
 つる歳余なりきりきりきりきりきりきりきりきり
 色をきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 かく、鈴木常雄々の事にて書ききりきりきりきりきり
 光出會ひしといひて常道といひて下で橋路より雪ありて
 来けりし事始りきりきりきりきりきりきりきりきり

をふあつて雪を楽しきりきりきりきりきりきりきり
 道をいへてあつてぬもあつてぬもあつてぬもあつてぬも
 言ふ名も大櫻とあり枝四つあり雪やあびりきりきり
 太さき十二人よつてて周回といふそふ齋りて不動明王堂家
 家二三戸ありて村名も大櫻といふいふ香衡東橋山小千本
 の櫻で殖りし事ありそのころのころのころのころのころ
 千歳ある本あるといふ事 雪もあつてぬもあつてぬも
 雪もあつてぬもあつてぬもあつてぬもあつてぬもあつてぬも
 古の言小鳥明神の塚の跡と雪にあり埋れ、白鳥二弟行住の名を
 人三あり、徳澤長根の雪の片岨小松の解ききりきりきり
 陣取り地しきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 いふとけり田の雪とて雪をりきりきりきりきりきりきり
 十

里、事分金命丸と名樂を賣る家あり。世里の良の方、小松の館
 といふ阿部を阿部兄弟極家と云れ瀬原柵ともいふものなり
 後、世に世と云ふものなり。夜川を橋より渡り、世をわたりを長
 谷と云ふ今を東に流ぬを七坪切といふ、わたりを兵多くうち死あふ
 活水小流といふ、其も武蔵坊をうり上り流れといふ、北上川
 夜川も一向に流るれど、夜川のあふ小とて、び上方北をむらる
 寄りの見ても、舟渡の上、流るも、あふも、身といひし
 ぬい、世夜川の源小清浄、瀧といひし、大なる瀧あり、今も障子
 生、語りよるむ、慈覺圓仁大師、夜とあふ、いひし、早あけ
 新し、給ひし、たまれ、けれ、それ、夜、夜、夜、の、流、の、末、夜、川
 といふもの、順徳帝、風、雨、夜、半、小、夜、の、せ、き、を、り、を、ゆ、れ、ぬ、に
 月、を、れ、し、し、み、給、ひ、し、為、國、の、古、跡、を、鶴、木、と、い、ひ、し、地、を、り、今

来、藻、里、の、印、の、方、小、あ、り、む、り、来、橋、山、の、林、鹿、を、櫻、あり、強、て
 世、接、れ、し、の、影、上、川、北、上、川、の、水、小、う、り、散、れ、ぬ、雪、の、流、を、こ、こ、と、く
 とい、む、り、う、け、れ、ぬ、朱、衡、北、上、川、を、孫、川、を、各、附、ら、れ、て、六、方、水、川
 せ、き、を、こ、こ、あ、り、し、今、も、来、橋、山、を、櫻、一、樹、も、あ、り、中、真、寺、の、邊、
 櫻、川、と、い、ひ、酒、酌、亭、と、い、ふ、の、む、り、自、任、舎、弟、則、任、命、惜、
 死、の、り、け、れ、ぬ、其、の、事、を、十、八、の、夫、の、勇、を、い、ひ、し、
 嬰、兒、と、い、ひ、し、今、世、を、あ、り、し、ぬ、り、し、ぬ、り、し、ぬ、り、し、ぬ、り、し、
 名、を、い、ひ、し、
 城、内、の、二、の、堀、小、身、と、い、ひ、し、
 在、り、て、二、城、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、二、堀、も、
 備、草、神、鎮、座、と、い、ひ、し、
 備、草、神、鎮、座、と、い、ひ、し、

と、い、ひ、し、

上

の紋ありて家の名を以て其の基細経を以て紺紙に金泥の字に
 色をふつやふたえりて此多し経典の中を合し世に一切経と
 文字の多し譯のりはともありしや。其の邊粉紙を黄色紙本
 の經ありて宗板ありて秀衡寄附の字ありて此經篋の文字に埋細
 とありしは其の唐櫃の内より大蛇の衝水火玉を以て藉紙に衣衣を
 せりてを以て金堂を俗に光堂と云ふ也。其の扉もありて
 こと天仁二年巳丑春清衡建之堂ありて七寢殿に殿の巻柱ありて
 の光長押の埋細ありて其のさむかひの埋細ありてその中より觀世音菩薩
 勢至菩薩地藏菩薩三尊ありて立像ありてその下より藤原
 清衡の指あり大治元年丙午七月十七日遊云左菩薩の下に基細
 指と隱せり保元二年丁丑三月十九日遊云右よりその下に
 秀衡入道指あり文治三年丁未の正月廿日遊云入道の指

和泉三郎忠衡の頭桶を後よりありてその三代の人の此桶は羊の
 脂肪を塗て巴年耶と云ふの指小攻に沙羅布と云ふ布ありて
 上より包封ありしは其の経布と云ふれりて其の解ぬれ此指
 桶にけつめさ薬氣と云ふるも其のつら眼ふりて音響ありて
 誰れをりしともあはれりて其のありて其の清衡基細秀
 衡三代の横かありてその飾ありて其の建武二年乙亥の
 中大かりて堂舎僧房院と残りて四十七字の洪鐘も其の同祥
 時の向ふ所とありしは其の事ありて其の金堂の焼けりて其の
 堂も屋根の焼けりて其の外を御佛の事ありて其の弁慶九寸か
 経蔵の事ありて其の外を御佛の事ありて其の弁慶九寸か
 其の事ありて其の山賊の事ありて其の山釘の事ありて其の二尺三寸の如
 其の事ありて其の山賊の事ありて其の山釘の事ありて其の二尺三寸の如

つらね

十一

向とつたりむう一京都をめぐり小寺の田帳のしき其寶物の内
 小見破石刀しきより破石刀のしきに似たりしものし
 ちうく辨慶時代のしきありしものしきに似たりしものし
 是、康永二年と刻りし洪鐘ありあり堂舎もさかりやと西の
 四阿雨下のけりし作りし辨財天の堂舎、金光明最勝王經、羅
 羅十卷の金匠とそそのりし物ありしものしきありしものし
 多し堂舎僧の在りし跡と見えたり物見たりしものしきありし
 此をめぐり衣河と名をたれしものしきありしものしきありしものし
 流れありし中の瀬とよも今も田畠ありぬ和泉の城岸の松尾井
 松達其野々とし残りし物ありしものしきありしものしきありしものし
 跡ありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 の館跡高館とありし武藏坊の館跡その外に兵卒の住りしものし

あり山賊の住家とありぬ義経堂小谷ありしものしきありしものし
 ありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 のかほり雪の中ハ花形とありしものしきありしものしきありしものし
 外堀ありし千町田とありしものしきありしものしきありしものし
 鐵塔とありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 納めたりし香衡の室のぬけありしものしきありしものしきありしものし
 ありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 ありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 りえとありしものしきありしものしきありしものしきありしものし
 師陸奥國修行のしき白毛のりしものしきありしものしきありしものし
 越て山に給りし白鹿ふりしものしきありしものしきありしものし
 今もありしものしきありしものしきありしものしきありしものし

へけて見えぬ圓仁、三々山々、むくなく、賤山、賤寺、之を、佛法流
 布、あれ、神の造給ふ者、と、こみ、さ、み、て、樂師、如來、を、安置、す、醫王山、
 毛、越、素、金剛、王院、と、い、天、台、宗、少、く、あ、り、ま、堂、舎、何、ぞ、文、衆、徒、を、と、
 薨、を、り、て、學、を、え、り、し、山、々、元、龜、三、年、の、大、火、あ、ち、ち、も、ち、や、け、て、今、
 礎、の、毛、殘、也、と、い、ま、嘉、祥、寺、破、壞、を、れ、る、と、い、ま、堀、河、院、鳥、羽、院、
 の、勅、あり、て、あ、ら、び、興、へ、藤、原、基、衡、の、建、り、と、い、ま、嘉、祥、寺、の、あ、ら、び、
 圓、隆、寺、と、い、ま、新、建、立、あり、ま、その、時、の、勅、使、を、左、少、辨、富、任、卿、
 富、任、三、輪、世、平、泉、本、任、り、ま、跡、を、勅、使、屋、敷、と、い、ま、鳥、崎、坊、と、い、
 衆、徒、の、あ、ら、び、ま、東、元、正、嘉、祥、の、あ、ら、び、相、模、寺、時、頼、最、明、寺、と、
 落、飾、を、あ、り、て、法、名、と、覺、了、房、道、宗、と、い、り、て、あ、ら、び、給、ひ、こ、ら、と、
 之、の、杖、を、曳、と、あ、れ、れ、と、庵、の、跡、あり、と、舞、鶴、池、も、雪、小、越、の、
 俚、れ、梵、字、池、鈴、澤、の、池、柳、の、御、所、を、清、衡、基、衡、の、館、の、跡、と、其、

いら、江、刺、郡、曲、豆、田、館、を、う、つ、さ、れ、て、曲、豆、田、御、所、と、い、ひ、ま、又、秀、衡、
 泰、衡、館、を、伽、羅、樂、御、所、と、い、ま、あ、ら、び、の、御、所、と、い、ひ、ま、泉、所、所、と、
 とい、ま、泉、酒、と、い、ま、曲、豆、酒、の、涌、る、事、あり、酒、を、榮、の、う、と、を、居、館、と、
 泉、御、所、も、名、附、れ、つ、る、事、あり、泉、酒、の、涌、出、り、池、の、跡、を、今、ま、泉、崎、と、い、
 ず、泉、三、郎、忠、衡、也、世、の、不、任、に、て、泉、と、い、ま、い、ま、和、泉、の、も、う、ま、
 あ、ら、び、い、ま、正、月、の、や、う、ら、ど、の、唱、歌、を、泉、酒、の、涌、出、り、と、
 言、酒、の、香、が、い、ま、妾、持、の、殿、の、う、と、と、今、年、酒、の、涌、出、り、と、い、ま、酒、の、
 香、が、い、ま、と、い、ま、い、ま、あり、り、か、つ、つ、と、い、ま、い、ま、い、ま、片、岡、八、郎、弘、常、の、
 館、跡、と、い、ま、鈴木、三、郎、重、家、の、館、跡、を、弘、台、寺、院、神、尊、寺、の、山、に、西、禁、
 在、り、ま、圓、位、上、人、選、集、抄、に、記、す、その、尼、寺、跡、あり、ま、花、立、山、と、い、
 少、あり、ま、基、衡、の、妻、某、の、四、月、二十、日、あり、ま、地、室、と、い、ま、花、と、
 好、と、い、ま、其、日、の、花、を、栽、作、り、て、地、山、と、い、ま、室、の、あ、ら、び、と、い、ま、花、立、山、

ふし、あ、ら、び、

一、五

煙てびりし其衝の室を阿倍宗任女^{ムスメ}と和敷^{ワキ}を志^シ事^{コト}かたりけり
 本草花とありて給ひし今も四月廿日小僧^{ショウ}あまこ出てやう
 葬^{ハナ}のきりて目とをり堂事^{ドウジ}今も数珠^{スズ}とけり幡^{ハタ}と之^{これ}實^{マコト}蓋^{フタ}寶^{ホウ}螺^{ラク}
 梵^{ハツ}唄^{ウタ}とあり是^{こゝ}を四^よの哭^{なき}祭^{まつり}と云^いふもあやもあやむむの哭^{なき}
 祭^{まつり}日^ひ給^{たま}はる僧^{そう}が事^{こと}と云^いふに舞^まうあひ金^{かね}歌^{うた}をまじしあふの
 事^{こと}と云^いふもあやむ哭^{なき}しと云^いふに志^し信^{しん}次^じ信^{しん}が館^{くわん}跡^{あと}を高^{たか}館^{くわん}の
 下^{した}の地^ちの岨^すのゆるい義^ぎ経^{けい}の御^ご館^{くわん}を高^{たか}館^{くわん}とてとく高^{たか}きあふ存^{ぞん}在^{ざい}
 その乱^{らん}世^{せい}小^{せう}九^く郎^{らう}判^{はん}官^{くわん}これまじしを怨^{うらみ}する一章^{いちやう}で口^{くち}の合^あて也^{なり}書^{しよ}子^こも
 うつゝぬきその太^{たい}刀^{とう}で腹^{はら}を切り給^{たま}はる文^{ぶん}治^ち五^ご年^{ねん}閏^に四^よ月^{げつ}廿^に九^く日^{にち}
 山^{さん}幸^{きやう}世^{せい}三^{さん}法^{ぽう}名^な通^{つう}山^{さん}源^{げん}公^{こう}大^{だい}居士^{くし}と稱^{なづ}て垂^た牌^{はい}を衣^い川^{せん}色^{しき}の雲^{うん}降^{かう}寺^じ
 也^{なり}と云^いふ清^{せい}悦^{えつ}物^{ぶつ}語^ご高^{たか}館^{くわん}落^{らく}のくさ小^{せう}判^{はん}官^{くわん}兼^{かね}房^{ぼう}とて今^{いま}
 生^{せい}害^{がい}あれと云^いふ作^{さく}らも兼^{かね}房^{ぼう}とてみりト云^いふ方^{かた}強^{かう}を討^うち死^しと云^いふ

給^{たま}はる前^{まへ}の様^{よう}も也^{なり}両^{りやう}公^{こう}云^い達^{たつ}と云^いふ事^{こと}も給^{たま}はる事^{こと}
 上^{うへ}れ義^ぎ経^{けい}今^{いま}を心^{こゝろ}と作^{つく}らる也^{なり}坪^{つら}の内^{うち}の岩^{いわ}小^{せう}町^{まち}腰^{こし}のきり
 金^{かね}合^あカ^かも小^{せう}腹^{はら}十^{じゆ}文^{ぶん}字^じをきり給^{たま}はる兼^{かね}房^{ぼう}評^{へう}説^{せつ}あれと云^いふ
 さうぬきすも兼^{かね}房^{ぼう}とて也^{なり}首^{くび}と云^いふ事^{こと}も兼^{かね}房^{ぼう}も腹^{はら}十^{じゆ}文^{ぶん}字^じの
 也^{なり}を五^ご臟^{ぞう}を綱^{つな}て是^{こゝ}を出^だして義^ぎ経^{けい}の首^{くび}と目^めの腹^{はら}の内^{うち}をわらわし
 也^{なり}の首^{くび}を以^{もつ}て巻^まきて也^{なり}息^{いき}絶^たつ清^{せい}悦^{えつ}常^{じやう}陸^{りく}近^{きん}習^{じゆ}二^に人^{にん}を中^{ちゆう}所^{じよ}
 火^ひをうけて一時^{いちじ}のうも小^{せう}煙^{えん}と云^いふ也^{なり}也^{なり}文^{ぶん}治^ち四^し年^{ねん}閏^に四^よ月^{げつ}廿^に八^{はち}日^{にち}より
 同^{どう}晦^{まい}日^{にち}はて三日^{さんじつ}三^{さん}夜^やの戦^{せん}ひして高^{たか}館^{くわん}の也^{なり}所^{ところ}落^{らく}城^{じやう}也^{なり}其^{その}時^{とき}衣^い川^{せん}の
 流^{りゅう}血^{けつ}の色^{しき}も深^{ふか}めて三日^{さんじつ}四^よ日^{にち}の也^{なり}を足^{あし}でしと云^いふ事^{こと}も上^{うへ}編^{へん}義^ぎ経^{けい}蝦^{しや}
 夷^い軍^{ぐん}談^{だん}高^{たか}館^{くわん}の也^{なり}がふ義^ぎ経^{けい}も權^{けん}頭^{とう}兼^{かね}房^{ぼう}が別^{わか}れぬ事^{こと}も深^{ふか}
 むせび給^{たま}はる事^{こと}も兼^{かね}房^{ぼう}も氣^き色^{しき}の名^なえされぬ事^{こと}も杉^{すぎ}目^め太^{たい}郎^{らう}行^{ぎやう}信^{しん}也^{なり}
 義^ぎ経^{けい}顔^{がん}回^{かい}給^{たま}はる事^{こと}も姓^{せい}名^なを犯^{とが}す義^ぎ経^{けい}の身^み身^み登^{のぼ}りて大^{だい}将^{じやう}也^{なり}

二二二二二二二

十一

常陸坊海存もなる子細の事いふは、城下築て一軍、距より追
 中も、高館小押寄也、勝負で決むと、文治五年閏四月廿九、茶
 衛が舎弟本吉冠者高衡、大将と、長崎太郎佐光同次郎俊光、照
 井太郎高春等、三方雄略、を三木に分け、衣川、高館、河寄、城中
 小吉、遠く、覺悟を早、行信を自害、けれ、菊房、即時、介錯、首
 錦の直來、おろ、は、み、座、上、下、身、身、も、腹、十、文、字、多、切、道、
 海存、又、是、を、介、錯、其、子、平、小、火、を、死、け、ぬ、り、煙、を、ま、さ、れ、
 常陸坊、跡、方、も、ひ、り、落、り、け、れ、同、五、卷、茶、衛、攻、泉、三、郎、忠、衡、去、
 去、程、小、日、本、奥、州、を、茶、衛、が、舎、弟、泉、三、郎、忠、衡、義、経、志、氣、保、く、
 勅、命、を、ま、さ、り、を、い、ひ、て、敵、軍、を、遠、く、遣、勒、の、罪、を、依、り、急、ぎ、忠、衡、
 謀、を、い、ひ、て、過、す、文、治、五、年、六、月、七、日、鎌、倉、に、飛、脚、奥、州、に、到、着、
 せ、り、同、日、三、日、を、茶、衛、が、使、者、と、し、一、族、新、田、冠、者、高、衡、義、経、の、首、を

黒漆の櫃ふたに美酒みづを浸ひ下さ人ひと二に人に下させ、腰越こしの浦うらを、茶着ちやくし、世由
 言こと上かみも、是こゝに、依より、首くび實じつ檢けんせ、和わ田た太た郎らう義ぎ盛せい梶かぢ原はら平へい三さん景けい時とき各
 鑑かん直ちく垂すいと、着きし、甲か冑けうの、即すなは徒た世せ騎き、お具ぐし、腰越こしを、泉い三さん郎らう忠ちゆう衡けい、首くびを、
 討うち、送くわり、糸いと神かみ妙たうに、就つき、泉い三さん郎らう忠ちゆう衡けいよ、つ、の、小こ吉きち二にの、忠ちゆう志し、
 討うち、遣は勒りの、者もの、出で、誓ちかむ、の、事こと、を、得えり、や、急いそぎ、忠ちゆう衡けいと、謀まを、い、ひ、
 然しかど、を、茶ちやく衛ゑいも、と、し、遣は勒りの、名な、を、傳たづね、り、は、い、は、是こゝに、類る類る、計けい、を、
 小こ非ひ、の、勅ちく命めいの、教けう、斯かの、如ごとく、を、世よに、告つげ、り、茶ちやく衛ゑいよ、中ちゆう吉きちと、仰おほま、
 され、御ご服ふくを、給たまは、り、け、新あらた田た冠かん者もの、高たか衡けい、夜よに、日ひを、繼つぎ、奥おく州しゅうに、馳かせ、
 ぬ、り、右みぎの、類ると、演うべ、り、茶ちやく衛ゑい、國くに衛ゑい表あはれ、を、ま、さ、り、と、仰おほま、
 恐おそび、や、茶ちやく衛ゑいの、者もの、人ひとを、つ、り、右みぎの、次つぎを、告つげ、り、北きた上かみを、御ご遠とほ方かたも、
 討うち、平へいの、勢せいと、差さ向むかへ、し、自みづか害がいせ、り、体ていを、と、て、高たか館かん、鷹たかの、中ちゆう跡あとを、茶ちやくし、

茶衛の事

又か遺言の通り蝦夷に渡り命を全くせしと云送る同廿六日
 初命初命は是非不及も忠衛を謀る事として自當八木實實計手
 の大将も其勢十分騎少く泉の屋に押寄せと興を任つて攻より
 ける館の中も忠衛が即徒にさへせんを歎ひける此泉の屋を無
 量光院と程近し折す夜も館に火のりける終に廿二日
 光院も火に焼られし寺僧等も火を論と防ぎけるも
 折す夜も此寺に故秀衛入道菩提所の為不建立あり雷地より
 宇治の平等院も募り扉も木衛自狩獲の跡を画し金銀と
 鑑めあり火も既小静しけれ向當八木實實の屋を黙檢するも
 忠衛の始の即徒も自言とえ死骸無く焼損も其形分り
 ありとあり云も忠衛家後蝦夷にさへ其夜泉三郎忠衛
 即徒共暫く防矢を射せし後館に火をさへ自言の跡も

ともあり東道より遁れ出て終蝦夷にさへ津輕深浦へと
 をたのびし頃を六月廿日頃の深浦の港を兼て秋田次郎が謀りて
 交易渡海船一艘此港に泊し松前蝦夷の安否を問居ありしが
 忠衛も安とやつし至徒十人降り買人の跡も見せ羽州秋田の者
 平泉へ高賣の為久く帰る世に昔前へ渡りせん居るゆ
 州船より舟来りしゆ又忠衛ははらひして義経の弟其堂所姫君の
 年を五歳小るし給と拍き思ひくみ姿をかく深浦の邊に思ひおせ
 忠衛介抱しなり増尾十郎權頭兼房が子増尾三郎兼色と兼
 十六歳ありける御其堂姫君の也を途で見届けしと高館
 城をさへ出泉三郎が子不隠れ任るが世に高館をさへ
 其外秋田が即徒並船頭水主梶取合三十餘人六月廿九日の秋田
 深浦の港に出帆せしが折し心叶ふ追風ありしに泊りし數日泊りし

つとむる

順風を得し小松前船一艘世港に着岸しけし如何なる船やむと思へば
 秋田次郎尚勝が即從松前の者を從、蝦夷の白紙鼻より來り船なり
 忠衛主從御臺にゆめ、あるく大に悦び急ぎ即從小遇ひて様子と尋
 義經主從恙なく去前小着岸し夫より今を端蝦夷白紙鼻より來り
 ありけり云ふと名を申し海存尚勝歸于日本といふなり、既小義經上
 國小凱陣に給ひければ、龜井鈴木と始りし伊勢三郎も假遣夫
 より來り志夫舎理の勝軍を祝ひけり常陸坊海存を義經上
 某儀是より御暇を給つてし、學業熟しやとて候、駒形獄
 解り彼異人の教におく仙道入る再び神通を得べく君に申
 せりしと諸大將やも懇いともをそひり、義經を世度ぬ
 來り功ありと志夫舎理の大敵を討取事難むとて石
 残を惜み給へども元より雷の氣ありけり御暇をあるけり、

來りし物も此嶋に從へば巡り會へき折し地ありと日本海あり船を
 下知給ひければ秋田次郎尚勝進みて其も君從ひなり君の武徳を
 以て多未仇敵丹呂印と討し事日未の本望何事は是より然り上り
 下先本國より三船り妻子もも過りて再び此地に渡り高し兵糧運
 漕、某沙汰し申しと義經小懇小暇を常陸坊海存並小松前の
 安呂由と共小同船、上國の海濱より本國へ出帆しける係りし後、
 松前より上國までの通路自由にて蝦夷の人民太平とを誒ひけり
 と名を尋、松前上國小太平ありとて天阿とて、
 誕まらり、秋田治郎尚勝と名あり本國に在りて、
 松前へ歸りぬ其物語云、秋田次郎尚勝を常陸坊海存、
 共小松前を出帆、海上難あり日本に地く着ければ、
 常陸坊と別になり、
 高小松前より、本國秋田に歸りし頃、日本建久二年、
 鎌倉の

かきしるる

九

武威盛にして過や文治五年八月、奥州に頼朝自軍兵を以て
 御館と攻め給ふ。皇子加志山、眞澄（奥州に於ては、眞澄は眞澄山と稱せしむるなり）子合戦あり、
 終に御館泰衡を家人河田次が為し討て給ふ。奥州も鎌倉殿の
 有となり事とて、涙を流しけり。河田と本國秋田を請りて渡海を
 自由せしけれ、密に兵糧の爲米穀を積りて船を以て送り、又船夫の舟を
 せしむる本國、積りてせしむる日頃、十倍を以てえり。奥州未嘗に
 蒙古と合戦度にも及び、程なく義経諸軍執を催し、前後八年の間、
 未嘗に亂を靜め蝦夷を二統一、太平の政行れり。河田次郎尚勝は
 後、去前より任を義経も、後未嘗に任を給ひ末を以てり。河田の
 給ひ、事を行われり、まければ家人身方も命を以てり。蝦夷國を治め
 ざるに、船を平家に入水せり。この未嘗も、よに在りて、その世を以てり。
 奥州、此平家の金堂、講堂、法華堂、南大門、大向彌陀堂、小向彌陀堂

慈覺大師堂、無量光院、白山社、日吉社、祇園社、天神社、熊野十二所社
 金堂、山鏡山、隆藏寺、伊豆權現社、護摩堂、などあり。河田の
 船、いもをも礎と見えり。いも、その世を以てり。奥州、金雞山とて、山を
 清衡の時せり。黄金の鶏、雄雌二翼を鑄せり。埋められ、
 湯にひて、金雞山とて、いも、いも、いも、旭や此夕日、權く木の下の
 漆、千五、こころ、億置、いも、いも、奥州、金雞山とて、いも、いも、いも、
 此夜を以てり。童子の童謡、いも、いも、出れ陸奥、いも、いも、いも、いも、
 かく、あけう、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、
 奥州、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、
 摩陀羅神御堂、小の及、寶冠阿彌陀佛、いも、いも、いも、いも、
 此御神を秘齋、摩多羅神を、比叡山、いも、いも、いも、いも、
 羅、權現の此事を、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、いも、
 大奉の牛奈

堂を王の皇後御面をかきたるはもとより牛小来り手大能うらちやと
 麻子吒羅神の由りてはゆきも弘法大師の祭文あり世事都名所圖
 會つてはもとや神祭はしほしりまは藤掛衣着され優遊塞堂
 八雲あつ出せし重垣に下あふへは既らその空垣文と太鼓百
 くら鳴して識ひし平代神樂ともふさう多以寶螺吹あて神供
 くらもそのへなりて隆藏寺の法印紅色の鬱多羅僧小三ふもさうの
 念珠をつまみ濱床の上座あり衆徒たちもび優遊塞堂入りぬ
 御誦經の多きく常行三昧と云事をいひ梵唄さともうあひ
 ころれ阿弥陀經を誦つてまゝ神の御前におくはりまの柳の年王とい
 まの七長き竹のくれま来てさゆりめさゆり世事終れといひ優遊塞
 堂法螺を吹き太鼓うていさうの神供とおろし圓居ける衆徒の
 前小居といふも神酒あはばりかや此直會といふ衆徒むも

ともみまゝに上所下所一和尚二和尚三和尚其次の
 下立新入まで穀部屋へ入給ひ申しと長やふも是を嘆息と云て
 中老の役御佛の脇方より衆徒へ出て上所下所一和尚二和尚三和
 尚それつきのひつらふさむひもさくこへへいひさ申しさいふは
 きてさら群れ集ふ祭見の中より鈴鈴て突といふ痛い痒いさ中
 へといふと似れれば大下急きさめめ事さしわさ田樂の事ぬ
 高足腰鼓をいせとを渡りて世も小舞舞田樂の小法師等
 胡桃木の膜皮を編み大笠の軒に垂さるやあひあひあひあひ
 山吹色の袖廣衣不袴着て桶の蓋に如あししく厚き太鼓や胸まか
 地三人の舞ふこと橋小登りあひく躍て今る焼豆豆腐さぬ曲
 せふりり烏帽子をさる櫛さるあさう是を忠てんといふ拍の上手を
 といひはひといひ師手能あといひ師手脇あ盛衰記不知康の事

二
 廿一

牡丹末小扇をさうして、丁五あぐ。玉母がむしひ前の友桃酒、
 や、まゝも、まゝも、まゝも、是と信じて、今が秋、まゝも、榮花の神、
 返り、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 鳴る、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 人をとり、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 び、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 第九、二代、堀河院の勅願を、まゝも、まゝも、まゝも、
 時難持の舊法をつと、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 小人衆徒の前や、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 ひまの、まゝも、三千坊、坂本を、まゝも、まゝも、まゝも、
 田口、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 の手小持て、舞入、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、

ぬれぬれ、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 女、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 の、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 けれ、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 なる、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 小、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 つ、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 ぢ、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 きて、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 う、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 富、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、
 心、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、

鈴木常雄 ^見、あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 かなはたりき ^{とありき}、 ^{夜も}あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 かう ^{あぢあぢれを}あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 三條もあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす

廿一日、今日このころはあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 へあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 向ふにけらふふあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 大あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 下戸の並居を賢しとまふふあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 鳥足の文字わりあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす

あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 長の日あぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 廿二日、今日このころはあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 山郷まごのあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 價の丸實もあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 思ひを出しあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 のあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす

廿三日、今日このころはあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす
 廿三日、今日このころはあぢあぢれを尋ね世まのありしむらゝのす

廿八日毛越寺の衆徒其三日吉山に登り戒壇をいそぎ、
 卍の世法師より小故郷を書きよむ。あつ里と馬と馬と
 のまき衣のひきまねを見ぬ夜もかたむきとまき衣と
 廿九日毛越寺にありて家々の門を閉り窓を空のあつる
 あつるをへ備ひまき衣をうけてさうまき衣の世法師と
 二月朔日毛越寺松林の森に栗の樹の鬼打立にて正月の
 莊飾はあつるまき衣の世法師のあつるまき衣と夜ひて
 あつるまき衣と世法師のあつるまき衣のあつるまき衣
 きの始の門を西の末と庭中小まき衣のまき衣のあつる
 置いてのうれまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣の
 まき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣
 の小豆粥とあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣

その稲作身著者十八日粥を喰ひて太著者十文字の級皮を
 縛りて屋の梁に投擲してその著者屋根裡に立立例る
 卍の地溝里の山目とあつるまき衣の門松も根をさるる
 その後正木の蔓をうらまねに飾りて 君代をまき衣
 うらまねに 牛歳をまき衣の枝にかくし
 二日 卍の祝のあつるまき衣の道もさるるまき衣のあつる
 下まつらあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣
 あつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつる
 鼻をたいて指をさるるまき衣のあつるまき衣のあつる
 まき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣
 まき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣
 三音をまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつる
 まき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣
 まき衣のあつるまき衣のあつるまき衣のあつるまき衣

カキハ

破損あり

小豆粥食の酒造り... 四日、五日を風吹つた... 是も慶長のむら... 曾我... 八幡尼... 湯殿山... 高館の猫間... 按察使中納言顯隆卿... 黄金... 王帽... 蜀江錦...

らうの龍... 燈籠... 南進... 大将頼朝... 奥州征伐記... 秀衡... 由利八郎... 三十四金... 前浜の驛... 白々疫癘神...

七九

1
 むらりくわるとむじの太い家美人を娘が育ちませその
 ろけうき女ムスメふ琵琶法師世家に泊り其母よりかう馬が家
 大木の脚マタりと黄金持カネりその娘を日れよりあう一生の常花トキとせん
 とく母のふやうとつらむとちと麗琵琶ウタを八もよもあふま
 てもよもすがかり冷ゆるむを米おせと法師の早のく
 してきてしを事とらつて夜を夜いとねを四緒ヨロされ檢ケン面
 さけを語り明てい娘を浴へつれむといふそのすめ娘を髪
 化粧をせんを磨トシ碓ツこつみきて琵琶法師のよを引きて大橋を渡
 娘をあまり負オシる傍ワタくまうすをいそはく休やすむせ給へ休やすむして
 いふふおやめとてあ給へとも目もあき人の事とあり世もあうて
 うまのそんうまのそんふふ今死シねんとて負オシひ来来つ其主磨シタ碓ツと
 やうこめ淵フチの鳥トリうたえうたせ岩イハ落おちかくれ息いきもはるむして好

かの琵琶法師をよりてりて云々あつた夫ウサとあむむと女メと
 劣せくとして貰シひ来来りものごととてあをけけとくとちきこれもさ
 とその大淵手オホフチ死シむるをあらふはと琵琶と磨トシ碓ツをき流ながれとつみ
 かるもありそれより琵琶と磨トシ碓ツの諺ことわざあやとらんちとんを語りぬ
 廿二日六日入いはる明あるある常雄トコ仙せん基もとよとみる事とを
 手てびがら自由中忠雄ちゆうちゆうるもといふまゝあまといふさうかありぬ
 うまのはなむけを今いま酒さけ飲のむ三さんの夜よの色いろをりそとあつらひ
 ちうまの嶋しまの梅うめの花はな貝かい花はなの波なみらあつらひ色いろはくさの
 末すえの美み山やまをれりしとあうつらふはうまの行ゆ道みちと人
 色いろづてりなれに地ち行ゆるもまゝ今いま成なりる今いまむらめもそま
 海うみのつとまうつてのうらむとくくくれす

廿三日つとく常雄トコふれ若わか敷し旅りをひいて行道ゆみちとせむしてのぬ

